



擬

名世說

上



蜀山先生編
文宝堂散木補

假名世說

初編二冊

東都書林

瑞星堂藏書

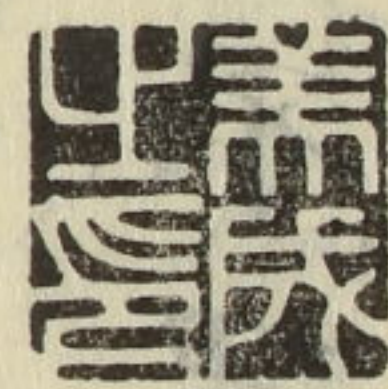
門4第
號39
卷1

假名世說序
書之有說也尚矣義慶氏取剔
於說林說苑而世說之書作焉
自是而降取則於斯者不為不
多矣在彼何氏語林在我大東
世語可謂其續耳慶元以來縉

紳高士誼儻詭異之行實繁有
徒則亦不可無說也蜀山翁有
見于此嘗作假名世說翁老罷
疎懶未能脫稿頃者書賈請上
之木縱吏不已其門人父寶與
校焉曰世說猶有補况此未定

冊子豈得不補乎來即我謀予
與翁交情特厚豈可以蕪陋而
辭乎曰抄所臆記者若干條與
之且語之曰古不謂乎貂不足
狗尾續後之覽者以之議之我
將以此對遂以此言為序

文政七年歲在甲申閏八月上
浣北峰山崎美成識



東陽關思亮書



こころ豊

解生行

年六十七

十五五

諸多河

市補近

聖給比

月魚

孝
豐山



文宝堂謹寫



今いのほまにぞううさまの一たゆ二文字もあらう
倒懸うらまんの耻とおどろく七午あまの光信
ふてばあわつるを我世終年りー辞世とやう
くあゝ

三上様
 此より
 保九年申上旬

入寂名阿耨院禪矣日一具足居士

不俟終焉期錄自記春秋七十二歲□□

のちて思ふありてはのけりあるを杉木とて
先づ一浪をよみて細吹の熊をよみてうきあり
しふたり同くありし中近は浪花の梅園主人に

くらゐの近松の碑をたゞしきものありき近松といふが故の早
 亡といふ見い名譽の医師に門下近松といふは格下であるとい
 傳説としてその例を刑としてとて自らつゝりてゐる
 近松門下といふ程をいふのである時兄は医師近松といふ
 あは淨瑠璃など作らうといふやうな時といふことだとい
 葉名のまじりごとく一字一畫の誤ありて人の性念よりい
 へる^{ダイジ}るゝ我々が他を承へて終つてゐる人お害な
 らざらうといふばらうもいふ理は腹にたゞし中々
 のゝまけのゝ大和めづるゝといふはさうしてめづるゝ
 げゝる寺子供のゝ今も龍田詣ゝといふのとまゝに虚
 構や查の物語と近松の碑をたゞしきものありき

十二月晦日年四十とてついでに柩とてついでについでに
柩とのり同様の諸子とて送るに谷中野村補陀の
寺に柩をまつて華供とて住僧下火の文とついでに
ついでについでに棺と破つて踏み出ると華をまつて
ついでに酒肴と替へてついでに舞をとりついでに人々耳目
と驚きついでについでに養老寺の堂に柩をまつてついでに
柩と碑と建自の碑とてついでに北華主と銘とて
世々の人々思ふとあせむ

英一蝶晚年はついでについでに日あびて画をふついでに
とついでについでについでについでについでについでに
おのついでについでについでについでについでに

いふ高き谷の語もくもくその町絵所くく近きあり
上手のくく誹謗でめくきくくくくく海風の目あき
きくく人あきくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくく

丁巳年三月廿五日

○大屋裏住い市に相分作し
白子と種をうけ
はる今秋の食糧
棟と大屋唐子
唐紙とよき書とよくあそび棚と改とくして
多千とくしくふれ大町家明らぐしく目うる火が出
くすふあり又名守人の山遠きありとくしく
雪も蛙もあふ一秋仲ら終る日もありてくしくあふ
此にあふ清神家よりくしく萩のあふ是くと陽りくしく

[illegible]

德行補

[illegible]

出雲 八重垣 妻籠 以上、二挺三弦

山彦 山彦 二挺三弦と

大瀬 吟 鏡心 ねむー 常盤

き井 ちんちん 籬 せーあ 百と張

十二弦 いっつら 以上十二挺三弦と

近江名子 一三弦 作他の細子入れ 以下不子あべ
元い板をとりて 難い細歩し ありけり 子あべ
三弦の胸より 一三弦の刺さるを しまし 是秘と
不あり 一三弦の目め 一三弦の音 一三弦の調 一三弦の
此三弦の系 一三弦の調子 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の
一三弦の一三弦 一三弦の一三弦 一三弦の一三弦 一三弦の

文學補

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の
はるれ 一三弦の

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

三語

○風来山人 一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の
一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の
一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の
一三弦の樂 一三弦の音 一三弦の調 一三弦のめ 一三弦の他 一三弦の

出るものゝやうにて出たはりしうすしなはた能くあ
らう——はたのうと申さるる世にあらはれしもの
なるものなり

言語

○ 海へは云門に冥途の旅の一里塚と云ふついで
 こゝに折まれしきと云ふと 無棘^{カケダ}鰐^ダ魚も魚の子散と悟
 るはさめし目もあはれと云ふ 冥斗能とかつて云ふ
 もの(4)四の字を睡てみればもろはくくくゆりあは
 ば 夢の事なり

張寧が「正徳」の魚のあつたところから世でさうか
 ね、張寧の「珍」の書は、牧溪の墨とて、くく、牧溪の
 墨とて、合かつく、不あつて、玉桂の墨とて、

巧藝補

紙漏補

[illegible]

德行

小松百島
二巻上と移し
元恒四町の書状也

持てた一人も、
而毎々外へ出。
とて小松の地を
懐中して途中に
送る。所由を述
べて、
今いふより裏店
にもお焼くもの
者ある。本年百
島の十金藏より
寛政のはじめ
了此人落し咄の
上手なひの上り
といふ。お小冊
大に好れられ
る。二落し咄は
不のうでせよ。

炭とつてさういふものゝ汗とて
 ちとさういふものゝ汗とて
 さういふものゝ汗とて
 さういふものゝ汗とて
 さういふものゝ汗とて

うゑのちひさしき

日暮里に片子の建つ石碑あり、此は四季の詩也

○西杉玄悦傳づゐのきまつとてちよは代とてしるべし
 可いなりかものいふ

方正補

[illegible]

輕詆補

[illegible]

[illegible][illegible]

按延宝のはり江戸のちねうるおもくけはつぐさ
 のまはもろへんはしり流る候ふ今昔をのこるごとく
 鎌倉よりきくかきの大田桑名各たのほの雲を焼く
 とんえんといふのそねと親所の助也ふのやとぞう
 畑方語園よりひやうのうすにんきふさふさ

九條改山公東福寺のつふ乾字法より教の中ね朽坊
おつり此法書の原主法親王の御子と云ふ源氏と説
く此物語はありうき事なり六十余年これ

仕誕補

ふもあふび是をうむ延寿の神代よりいふ
ふり作らうとて時給色は格すあつてはとほら
ぢふふふふふふふふふふふふふふふふ
けふの間のふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

廣次先生

姓細井名いおはうい
公謹改めたまふ後

のふふふ服居の小刀七月の

ま八月のおふふ研ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

雅量補

郭先生

姓狼部名い元喬字い
子慶小名い結きふあ

小豆飯のあふふふふふふふふふふふ

ふふふ金華

姓手母名い玄仲字い和
系奥の人とて金華と号

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

言語

あづふふふふふふふふふふふふふふふ
金華先生鬼の首と挑灯の紋をけらふと組来先生
ふふふ金華があふふふふふふふふふふ
ふふふ金華と金華鬼の首と挑灯とふふふ
彼中ふふふふふふふふふふふふふふふ
あふふふふふふふふふふふふふふふふ

○二河万歳の唱歌は銘跡十年辰のふふ
はふふふふふふふふふふふふふふふ
銘跡勅元辛卯二月二十二日ふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ

言語補

萩生惣太夫が和語の中を通りさへにやう
——うううううううううううううううう
わいゆあなうちうううううううううううう

本阿弥光悦が行状記としてまとめたものかと思われる。光悦の藝一としての其四年は、いかにその名を著し、またその一字を移さずともかくもあつたかや。小致として、喜をばく用ひしゆゑ筆道もよく九境にもつけ、その刀劍の鑒定などもいはふとあるにあらう。武あり人をあり一時れ偉らざりしやう。京都の北をぶ峰、い母坂より山びづり人家稀にして樹木よくしらるるところを盜賊ついでけ違ふかれ旅人とあやまり

賞善補

巧藝補

京師より入るる客車より者令ありて光悦なり
 地といふなり此は光悦家なりとわづまふる盗賊ふく
 のびきりしもの此の世なりとて光悦が
 人といふるに母めきりては凡のま育ふなりとて
 京都千本通下主臺に燵^{ヒヤナ}を置き老翁あり吉久と云ふ改
 二年西石百十と云ふ壯健なり旅次の旅なりとて
 毎日自より燵を拂出て諸方へ南より歩りて又是と云ふ
 ある故一桑園白公より鉄石軒より一歩とて一歩おま
 たりあるといふる書の名なりとてめまふるなりとて老
 翁といふるものなり鉄石軒より鉄石とて夢はるの夢
 九十七歳是なりといふにそのやとてあるなりとて

德行補

来生よりまてやういふより来る迄をいふこと
 但来生に刑律と云ふ事やあらうと不ちかしくて春
 あり足下よりぐうぬくをあらうとまてはまた大切
 せしめたりといふこと

捷悟

○天明の比にまづて
 悟路といふものあり
 悟路といふものあり
 悟路といふものあり
 悟路といふものあり

九月 卯命に
 市川 國光より
 九月 卯命に
 市川 國光より

了て海軍の事々々

方正補

家道の句 諸君万々句のしつはれまゝに
 けいの佳句 一人のめしや
 いろ ぐい茶をいであ
 ふふふふふふふふふふ
 主画と展覧とゆう用意とてさし東涯とて
 の詩あり

量功奴僕出荒迢
煙下煙中梅雨
醉後睡去盡忙裏
切戒主生謹繡編

心越禪師律呂の學にたゞく徂來翁の家より柏木口へ來りて
すゝみなるやうなりと云ふ事あり對面なる翁墓邊の人より
之を告げしところありしに心越は年をとるにけだむ

雅量補

[illegible]

此の硯笥を本入れ厨箱とせ誰用と云ふといふ
 風ありて芳町はいも方よのくたぐく北里れりい處
 ありては客のしと名と云ふはみよおのぐ本と云ふ
 ことありて諸山くれ自渡ありと

田阿子 牛込三十三番町 い土佐の画風とありき。もとくち
あるありが、甚す物なり。むい静なり。性寛容なり。
く、筆よりなり。此、寛政乙卯の年正月十日、牛込新所
う、火出く西北風に烈しく、坂田町迄も引焼あり。これ
諸道より、小土屋をとりて、かくかくさるゝ人もあつた。妻の
門口へ入らんが、この年は大枝ぬれ掛幅と背負ふものまで

[illegible]

捷悟補

企羨
補

[illegible]

[illegible]

七

沙汰ししるしるは三多敷此のやまといはく感心し
 しかる。執人のふしで借ぎてまづして明季とぞ
 まいりしむ有るものか。深望のまゝに
 人もあまうし。言ひをきくは
 かくいひ出てうゝ物衣の袖にまねかして
 終りしむ

雜調

○四谷新客子飯堂女のしや新し時風におおはるる
くさくさ平秩年姓ま松名い博之
稻毛を秩村者住がきあふとさうはるる

あゝの一夜ありぬ浦々々

うゑはむかし

文学

○
漢中天子
嵯峨天皇
贈海上人
御製詩
所

文学
補

字母弘ニ乗真言演四句とらて佛空海の以呂
彼と仰く一すまゝ和名抄字母とイロと訓と一又今
のねづまうはのふまてもうねづまうとせしむり
とて

此の等々字體は弘治大匠の筆と云へば、
 其の筆の的評ありて、予々計門郡神つまは、大匠正跡の
 以呂波の一番如以呂波製紙の時の筆よりいふれば、
 室町一時代の住持も一化は一まゝとて、
 紙に別はる圓親王の字も一通途に在りて、
 予々此の筆を以て、
 予々終るに、
 予々此の筆を以て、

巧藝補

あつてこの書も又同様に此書詠の事と河津連珠集及び
本朝学原流抄等々も又それ等々以品波問辨の責
とてしるべきなり

南京陶工より即ち吳祥瑞送る銘とあり
日本勢可なり陶工入唐のなりけり
明の正徳八年頃なり
送る銘あり
送居士より文士曰本

穀將玉帛觀天顏
 四首持香湯
 向舡泊古鄣
 夜地杯傳新酒
 四明山梅黃
 細雨江陵別
 帆引江風海
 上還明主貴
 王應有向八
 方財貢溢朝
 班

德行
補

石田梅岩 勘平の移しんけの 四十二二年の時を引くまゝ
法家の講釈とは四十五年附主邸車を町通り停地し
正左衛門の侍ありしに、講席をひきよめ表の控より出て
おろし其とき

何月何日何講席録入ありしを録す。

あつた方とては、法家の通り、いふに、

いづれにても講釈のついでに、いふに、出を被るの席に
男女同く坐せり。廿二日、いふに、いふに、いふに、

○平親東作云、自傳も、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

言語

德行

○いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

于時天正卯五月廿日成就主筆成田内膳正後見
方念佛清迴向憑入あり

言語

○いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

文学
補

平終章 姓平名い終章 云、菊子和訓ありしに、いふに、いふに、
和訓の詮、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、
いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、いふに、

國史に六國史と却額し、その後日本紀の桓武紀より
あふべしと考へざるを、おぼそきと
將軍等國の比東福寺の聖一國所、陶元亮が詩とよめり

採^ニ菊東籬下^{アキハハナ}悠然見南山^ニ

と削ぎなりと禅林の詩侶にほくられも菊の二字であらし
べふと和削つけいもうさうくはこびづー削ぎ
ぞや梅ともめ削ド桜ともく擇りゑんちあそ
おろろろろろろろ

文学
補

侃訖 本姓石商初名正禱字仲維後名藝字子瞻又更訖訖山人字一玄在無上稱

とて儒者乃漢の碑と云

左邊大吏とまゝと瓶山と者別て云々其のいふ事今式
職系よりみれば瓶波初ととるべきことと云々其の時瓶波

多く出資せしむるは、名に、そのり、の、と、ある、に、は、細、さ、る、ま
 う、さ、し、出、し、る、季、の、星、曙、抄、と、按、じ、る、中、勢、五、山、彦、太、右、の
 所、監、左、太、右、も、清、利、も、官、中、宿、添、の、方、と、は、な、り、し、る、に、
 且、し、お、當、六、位、の、と、千、藤、と、稱、し、五、位、の、の、の、の、の、の、
 由、の、訓、し、れ、御、用、に、能、弁、じ、し、る、表、の、官、も、出、し、る、に、
 上の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 め、佐、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、の、
 又、た、其、の、中、勢、太、右、^{大、補、と、い、ふ、}別、に、^{と、い、ふ、}ア、太、右、と、五、位、と、
 する、唐、階、の、因、り、官、の、正、名、と、あ、る、に、^{と、い、ふ、}ま、と、名、の、
 ら、あ、る、に、お、よ、ぶ、新、し、又、は、代、り、移、り、し、る、に、^{と、い、ふ、}な、り、
 移、り、し、る、に、新、し、る、に、^{と、い、ふ、}ま、と、名、の、

風惠
補

言語

雅量

白石先生 名ハ瑛字ハ君友又在中
白と幸一 易解由と格 七世の時芝居をせしむるに
終まで一々記憶しつゝ此見ありと云ふに
あはれもしくあはれと云ふに

○國倫云風流在雅新唯ハ旗のふりあはれと云ふに スドリ
スリ 膝子
女財所を散せし男倡のふりあはれと云ふに

○青字のふりあはれと云ふに 青字和尚のふりあはれと云ふに
所のまじりてと云ふに 三十三年ぬきあはれと云ふに 萬翠一
と云ふに 扇のふりあはれと云ふに 扇のふりあはれと云ふに
ふりあはれと云ふに 連年性楽のふりあはれと云ふに
大勢押はと云ふに 坊のふりあはれと云ふに 不集
四編

識
補

古道青山 靜室白月 紫つ信客路多室客天
寛茶水清き飲菊英方可餐 陶家秋色少此就
遠公看のふりあはれ

又唐禪師の源子和尚の方外なるに 諸國の神の神出
ふりあはれと云ふに 源子のふりあはれと云ふに 源子のふりあはれと云ふに
庭子の格のふりあはれと云ふに 庭子の格のふりあはれと云ふに 庭子の格のふりあはれと云ふに
此と云ふに 振と云ふに 振と云ふに 振と云ふに 振と云ふに 振と云ふに
第二のふりあはれと云ふに 第二のふりあはれと云ふに 第二のふりあはれと云ふに 第二のふりあはれと云ふに
ふりあはれと云ふに ふりあはれと云ふに ふりあはれと云ふに ふりあはれと云ふに ふりあはれと云ふに
大いなるふりあはれと云ふに 大いなるふりあはれと云ふに 大いなるふりあはれと云ふに 大いなるふりあはれと云ふに 大いなるふりあはれと云ふに

まみなりくたしものまゝあつてゐるが、
と出掛くさるゝと僧一人も、
祥符笑く退散さるゝ後手と云ふ、
はゞだけ後制もたやうと要人の者とおもひ、
ふれゝゝとてゝとて退散さるゝとてゝとて、
感服さるゝの誠信も、
誠と云ふゝとてゝとてゝとてゝとてゝとて、
圓の信も、
さるゝとてゝとてゝとてゝとてゝとてゝとて、
あるさるゝとてゝとてゝとてゝとてゝとてゝとて、
さるゝとてゝとてゝとてゝとてゝとてゝとてゝとて

○香山和尚十二かゝる縁ひより二十かゝる、
つゝと三千とてゝとて母と稱へゝとて、
ふとて
百か味略二るか新二るか、
とてゝとてれ泉谷寺とてゝとて、
塔とてゝとて天すありとてゝとて、
争の名匠とてゝとて近はま定とてゝとて、
近はり作の争とてゝとて人い長稀ありとてゝとて、
中よかのみとてゝとて近はりとてゝとて、
近はりとてゝとて又人いとてゝとて、
定とてゝとて大とてゝとて

跡を尋ねて見れば松竹の作付なりけり。其の傍に思ふ折中懐
中のみある金千石の佛を祀るなり。

貞享二乙丑年十月二日

村成信

廣嚴寺和尚

排調

○香山和尚の物語の末の先生つ下の諸々のあつてかゝる
ときやわづらひてゐるものなり。同じくおなじと云ふ
いふは生後より二十四文の月お郎や——と云ふ
や——と云ふ。

言語

○東洋云ふ——と云ふ人々ば、いふと云ふ人々ば、いふ
と云ふ人々ば、いふと云ふ人々の申しつゝ、いふと
や——と云ふ。いふと云ふ人々ば、いふと云ふ人々ば、

豪華

いふと云ふ人々ば、いふと云ふ人々ば、

○但来るに庫里のまのまのの掛あつて、今に云ふと云ふ
亦られ、其の中は、いふと云ふ人々の申しつゝ、いふと
靨靨洞洞、天目集、李本寧集、いふと云ふ人々の申しつゝ、
家財を賣拂ふと云ふ人々ば、いふと云ふ人々ば、

補

宇佐美瀧水の寸丈矩の序に云余遊於護國見其多書
焉先輩謂余曰曩者藏主家破産者欲盡賣其書有
以未先祖徠先生、湖之大吏所有衣服器用玩好
項藝除不可缺お遺一物輯以行賣所不足乞貸諸
其所知盡獲其書矣、いふと云ふ人々の申しつゝ、いふと
な人古と云ふ人々ば、いふと云ふ人々ば、

愈捐補

小次サ戸菴を病ひてくく、あやに病をうけ
あゝ其家の二階より和歌のつくろひ病の所より
つゝも尋ずるに、さう病を金に換はせと云く、
かゝる病を病ひてくく、降のちのちと云く、
訪ふに、病を二ふりて、病をうけ、
くく、かゝる病を病ひてくく、其奥に一首の和歌を
人の世の病を病ひてくく、病をうけ、
くく、くく、くく、くく、くく、くく、
くく、くく、くく、くく、くく、くく、

夢遺補

白石先生弱冠以时家貧くまふ之 其後河村氏来り
し者まふく好くし中より其家よりて多量紙

上廿九

雅量

うゝ何某も凡庸の人なれども、
さうしてあつてあるをいふと白石のうゝ
いひ只まよふなり。彼が鄙まのやうな
おこづきく解せしむるあり。

○元禄宝永のはおあまか〜く坊と〜り〜有あり幸
ふ話の行く富士の風景とつゝありむ薩長土首のふあり
す〜ゆき〜け〜碗のふきなり〜い〜も〜れ〜る〜あ〜る〜い
づゝも〜星羅富士とを〜〜〜〜〜

德行補

[illegible]

